

艦隊こくしよん しま〇ぜ陵辱CG集

かんこわ
艦壊

徹底異種陵辱

孕ませ有り 出産は別フォルダに隔離 (出産回数7回)

基本CG14枚 文字つき含む差分多数 CG総数157枚

『わたしを……どうするつもり……？』

海棲艦たちに捕らえられた島風は、
触手にその細い体を完全に固定されていた。

鹵獲された艦船で、戻ってきたものは居ない。

助からないかもしれない。その恐怖に、
必死で耐えようとしている。



『ああっ!』

触手が器用に動き、彼女のスカートを引き剥がす。

同時に、提督にたびたび扇情的と注意されてきた、黒い下着があらわになる。



『うっ…やめてよお…』

ぐいっと思ひ切り引き上げられた下着の横から、
島風の秘所にむかって複数の触手が伸びる。

戦い以外になにも知らない、無垢な艦娘の肉体は、
初めて感じるその刺激に敏感に反応していた。



意識は抗い続けてはいるが、
あまりにも執拗な触手の責めに、
肉体が先に屈服してしまった。

透明な愛液が
触手の先端と、食い込んだ下着を濡らす。
陵辱の予感に戦慄しながら、島風はその小さな体を
震わせている。



『い……いぎいぎいぎ……』

絶叫とともに、濡れそぼっていた島風の性器を、一度に5本もの触手が貫いた。

可憐な花びらが、汚らしい触手に蹂躪される。

『そ……そんな……わたし……はじめてだったのに……』



ドボオツ！ドブウツ！

触手たちの動きが激しさを増し、遂に島風の膣内に熱い粘液が吐き出された。

『やめ…やめてえええっ！ださないでええっ！』

子宮内までも汚されるその勢いに、なすすべなく泣き叫ぶ少女。



何日か経ったのだろうか。

少女を襲った陵辱は、

ただ犯して終わりといったものではなかった。

膨れあがってしまった腹が、その証だ。

『うう…誰か…助けて…やだよ…こんな…』

うわごとのように島風は呟き続けている。

現実を受け止めることができないでいるのだ。



『い…いぎ…あ…』

メリメリと音を立てるようにして
柔らかな秘肉を割りながら、
甲骨魚類のような何かが産まれて来る。

彼女たちがこれまで散々戦ってきた、
敵艦隊のザコに似ている。

(…っやって産まれてくるのか…私達の敵は…)

絶望に意識が真っ暗に染まり、島風は気を失った…

島風に次に襲い掛かったのは節足動物型の怪物だった。

『ひっ……！気持ち悪い、なにこれ……』

武装を破壊された島風に抵抗などできるはずもなく、鉤爪で太ももを左右に開かされ、無毛の恥部があらわになる。



あまりにも大きい、異常な形の生殖器が
そいつの体から現れる。

「ん……ん……」

一回目の陵辱と、そのあとの妊娠で
膣が通常より広い状態といっても、
この巨大な生殖器は
挿入物の限界をあきらかに超えている。

体内を破壊され、死ぬ可能性は否定できない。



『ぶっーぶっーいっーんぐんぐんっー！』

恐ろしい悲鳴を上げながら、島風はその巨大な肉柱を小さい割れ目で受け入れる。



いや、受け入れさせられている。限界以上に広がった彼女の性器。圧迫感に呼吸もできず、目の焦点は合わなくなっている。

セックスやレイプという言葉で表現するにはあまりにも
無残な節足動物との異種交尾。

至急内を完全に征服した。ペニスの先端は
横隔膜を突き上げ、心臓や肺に衝撃を与えながら
島風の体内すべてを犯しきっている。

（死…死んじやう…早くおわってえ…）
息も絶え絶えの島風はもはや叫び声すら上げられず、
ただこの強制種付けが終わることだけを願っている。



ドブツードブツウ……

『げへっ！』

白目をむきながら、蛙がつぶれたような声をあげて、
精液をぶち込まれる島風。

そのしなやかで美しい肉体は、大量に注がれる化け物の
精液で、樽のように膨れていく。
ぼやけた意識の片隅で、
島風は妊娠していないことを祈っている。



その一回では妊娠しなかったのが
バケモノの癩に障ったのかもしれない。

ものすごい回数性交尾を強制された結果、
島風の割れ目はそのサイズのあわせて拡張され、
乳首とともに黒ずんでしまった。

しかも、結局のところしっかりと孕まされている。
(死にたい...)そう考えることが多くなっていた。



ぶりゆぶりゆ、と汚らしい音を立てて、
また一匹、新たな命が産み落とされる。

『ぎ…ひい…アハ…アハ…』

変色した乳首からは母乳が噴出し、
島風は乾いた笑いを漏らす。

へその緒でしっかりとつながったぞらばは、
じきに自力でそれを噛み千切り、
世界に仇なす怪物として独り立ちするのだから。
むごすぎる現実から目を背けようと、
島風は必死に狂気に逃げ込もうとしている。



『うあっ!』

巨大な半魚人のような生物が、
島風を乱暴に突き飛ばし、
床に四つばいこさせる。

前回の妊娠後、海草から取れると思しき葉のような粘液を
塗りこまれたからだろうか。

秘所は、すっかり元通りの愛らしさを取り戻している。



『お、お願い、もっとやさし〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜』

悲鳴を上げるのも無理はない。
そいつのペニスはいボだらけな上に
二本あったのだ。

島風の前後の穴を
いっぺんに貫き、

根元まで埋め込んで
抜ける寸前まで引き、
長いストロークで
肉の感触を楽しんでいる。





ゴホン…ゴホン…

「ゴルツッーゴルツッー」

「お、おぐっ…おい」

おぞましい音とともに、
両方の穴に精液が注がれる。

前の穴はもとより、
びつちりと締まった尻穴に
放出されるそれは
特に量が多く、
消化管をすべて逆流して
迸る。

「ジュンジュンっ？」

ひとときわ苦しそうな島風の悲鳴と共に、
喉奥から口内へと精液がぶちまかれた。

『ん…んむ…』

半魚人型の下級眷属への
奉仕は続いている。

決して解放する必要のない、
何をしてでも許される奴隷。

しかも万全の状態なら自分たちなどでは
とてもかなわぬ戦闘力を誇る相手。

化け物たちがそんな獲物に
飛びつかぬわけがないのだ。



「んむおっっ！」

ものすごい大きさの怪物の性器が、
島風の秘唇にぐるぐると愛撫もせずにごち込まれる。

見事に根元まで埋まったその圧力で、
少女の腹は膨れてしまう。

そもそも愛撫など
必要なはずもない。

流し込まれ続ける
多量の精液が潤滑剤の
役割を果たし、
島風のそこは常に
どんなものでも挿入できる
状態だからだ。

乱暴なピストン運動に、思わず口での奉仕を忘れそうになる。
苦しさのためではもはやない。
絶え間ない陵辱に、体が快楽を感じてしまうからだ。



「フビエター、フビエールッ！」

「二頭のバケモノがその性欲の滾りをぶちまける。」

島風の上下の穴は、熱い粘液で
たちまちいっぱいになった。

睨けられている通りに、喉を鳴らして
精液を飲む。

そして「一滴も」ほさぬように膣の括約筋で
脈動するペニスを締め付ける。



しかしやはり膨大な量の精液を
飲みきれず、咳き込みながら白いものを溢れさせる。



脱走を試みた島風。

あえなく失敗し、許しを請う彼女に科されたのは岩のような肌の巨大な怪物との子作りだった。

二本の逸物が愛らしい少女の肉体を貫く。

『嫌ああああ!』

悲鳴を上げて暴れるが、
陵辱はそんなものを一切意に介さずに続く。



高密度の精液が島風の膣と尻の両方を
蹂躪する。

「……あ……」

悲鳴といったには弱々しすぎるその声は、
むしろ嬌声といったほうが正解だろう。



刑罰の目的はほぼ達成されようとしていた。

しばらくぶりにつきかりと孕まされた島風は、
焦点の合わない視線を宙にさまよわせている。

『もっ……もっ……あかひゃん……うむのやらああ……』



快樂と苦痛で破壊されかけた心。

必死に懇願を続けるが、もちろん聞かぬものなどない。

「かは……っ……あ……」

島風の絶望の吐息ととも、
そいつはほほ自力で産道から這い出した。

怪物そのもの見た目、
恐ろしい門歯が生えそろうつらる。



（おっぱいあげるとき、乳首がまれたらすごく痛いだろうな……）

おぞましい姿のわが子を眺めながら、心の中でじゅわく。



マツコウクヅラのような、巨大な怪物。

巨体に対して小さい足で必死に立ちながら、

島風のやわらかくてしなやかな尻にひたすらに腰を打ち付ける。

妊娠してしまっただけからは、当然のように後ろの穴を使われている。

もう何発ぶち込まれたかわからない。

精液のぬめりで、
ビール瓶のように太い
怪物のペニス滑らかに
出入りする。

後ろのバケモノのうなり方からして射精は近いようだ。

(次すくくっばい出されたら……きつとまた、あぁなっちやう……)

絶望的な気持ちで、アナルを犯され続ける島風。



「ぎゅっーんぐんぐんぐん」

島風が急に咳き込むと、その愛らしい口から、多量の精液が迸り出る。

尻に射精された精液がまたもあふれ出てきたのだ。通常なら絶対にありえないことだが、この海底の牢獄では日常のな「よくあること」になっていた。



恐ろしい量の精液で腹圧が上昇し、ぬるりと流線型の何かが
島風の子宮から外へと流れ出た。

滑らかな形状ゆえに
安産の極みだったのだろう、
ほとんど苦痛のない、
スムーズな出産。

自分が怪物の仔を産んでいるように
実感が強く胸に迫ってきて
心の痛みで涙があふれてくる。



（まだ…イカないのかな…）

ぎこちない手つきで、深海魚と人間の混血めいたバケモノたちのペニスをしごく。

一日に何体相手にすればいいのか、疲れはてた両手は鉛のように重い。



『ん…っ！な、何…!？』

突然島風の小さい口に、生臭いペニスが押し込まれる。
それも二本。

口が裂けそうなほどに広がり、苦痛に島風は顔をゆがめる。

計四本のペニスを相手取り、奉仕をひたすらに強いられ続ける。



どぼどぼと追加の精液が注がれ続ける。

人間換算なら30人分はあるうかという白濁液の奔流。

（こいつらの精液…すっごく臭い…）

悪臭にまみれ、必死でかぶりを振る島風の頭を押さえつけ
一滴残らず注ぎ込み、顔にぶちまけ、塗りこむ。



解放されたときには、島風の全身が精液まみれになってしまっていた。

口をあけて、飲みきれない分の精液を滝のように流してみせる。

胸元に厚い粘液の層ができるのを感じながら、島風は荒い息をついている。



『はぐ…あ…っ』

押し殺した悲鳴が上がる。小さい島風の体を押しつぶすようにして、彼女の太もも位はある巨根が挿入されていく。

余興として武装無しのまま、

巨体の雑魚相手に戦うことを強いられた結果だった。

勝利時の条件は牢獄から解放されること。
敗北時の条件は、当然ながら『陵辱』だ。

昼夜問わず犯され続けているのだから日常が続くだけとも言えるのだが。



ブビュッーブビュルッー!

汚い音を立てながら、そいつは島風の膣内に
多量の精液をぶちまける。

熱く生命力に満ちたその粘液は、島風の子宮内を
焼き尽くすようにして汚していく。

『もう……いや……だれかあ……』

いつまでこんな地獄が続くのだろうか。



その怪物とのゲームは島風が妊娠してもなお
定期的に続けられた。

大きな腹の重みに頼りのスピードすら失い、
今回もまた敗北。

床と同じ体位で転がされつつも、
巨大な怪物をキツとにらみつける。

だが、その目にはもはやほとんど光がない。



『ぐんぐん……お、お尻……い……』

ものすごい質量のペニスが貫いたのは島風の後ろの穴だ。

締め付けが特にいいその穴は、ともすれば腰を引くときに島風の体が半ば浮き上がってしまうが、打ち下ろすときに彼女が頭や背中を床に強打するのもかまわず猛烈に腰を振る。

『い……痛いよお……やめ……がはっ！ぐんぐん！』



直腸の射精の衝撃で一瞬意識が飛んでいたらしい。

顔に自分の母乳が当たる感覚に目を覚ますと、
片乳をしっかりと抱え込んで、

異形の赤子が喉を鳴らしている光景が
眼前にあった。

ぽつかりと開いた産道に空気が入り、

子宮の中にまで風が吹き込んでいく気がする。

(終わらない…いつまでも…はやく…終わって…)

殺されるのでも狂ってしまうのでも何でもいい。
ただこの苦痛を誰か終わりにしてほしい。
砕けかけた彼女の意識は、そう願ってやまない。





「は…放して…!」

すさまじい力でラ級の触手が、
手足を締め上げる。

全くの無言が不気味だが、
その赤く光る目には
残酷な笑みが浮かぶ。



『や…やあああ…』

黒い薄布はあつというまにずり下るよ
島風は度重なる陵辱にも形が崩れた
可愛らしい割れ目を外気にさらす。

『お願い…許して…』

ドビュルウツッ！ ビュルウツッ！
表情一つ変えずに、ヲ級は精液を注ぎ込む。

性器自体が蠕動し、一滴残らず狭い腔に
子種を流し込み終わるまで、実に20分

「また…孕まされ…ちやうんだ…」

朦朧とする意識のなかで、島風は絶望を噛み締める。





海棲艦やその下級眷属の胎児は、異常なまでに繁殖力が強い。通常の生物の実に30倍以上もの速度で成長する。

母胎たる島風の細い体が、臨月の妊婦の形となるまじう長い時間はかからなかった。

恐怖に震えながら、自分の膨れた腹と乳房を見下ろす。それ以外にできることは何一つないのだ。



母乳が宙に舞い散るなか、異形のわが子が産声を上げ
エビのように身をぞらしながら生まれたそれは、
足の部分に牙のような骨質のものが生えそろうた、
凶悪な姿をしている。

いずれは癡猛な怪物となって、鎮守府を襲うのだから。
島風はただ泣くこと以外に何もできず、
声を押し殺して耐えている。

二頭の深海棲魚人の相手をさせられる島風。
子宮はすでに別の化け物の子を種付け済みだが、
快楽を求めるオスたちの欲望には
常に応え続けなければいけない。





ムリムリ、という不気味な音を立てて、
下になっている海底棲魚人の性器が体内から露出する。

その規格外のサイズにゾツとする島風。

前はどんなものでも入るほどになっているが、

後ろはそこまで開発されきっていないのだ。



すでに先走り液でぬれているそれは、
もの凄い圧迫感とともに、鳥風の後ろの穴を
こじ開けて入ってきた。

弾力性があるとはいえばビール瓶より太いようなそのペニスを
精一杯の力で腰をグラインドさせて扱きあげる。

(すっぴい……これ……)

奥まで肉柱を叩き込まれるほどに、なんとも言えない充実感とともに
寒気に似た快感が体中を走る

『ん…んむっ…んっ！』


口を離すことも許されないままに、パイズリフェラの最中のペニスが魚を腐らせたような匂いの精液を口にぶちまける。

同時に、骨盤が広がるかというサイズのペニスが、直腸内に無制限に精液を放出する。

『ぶぐっ！ぶぐお…っ！…ん…ん…っ！』

口とアナルを同時に蹂躪され、両方の穴で精液を飲み込み続ける島風。





種付けされた腹の子が大きくなってきていても、
奉仕の激しさは変わらないどころか、むしろ増している。

喉の力を抜いて極太のペニスでも飲み込めるようになってきている口。
大きくなったバストはさらに強い乳圧でオスたちのモノを締め付ける。

後ろの穴も腹圧自体が高まっているせいで、何回犯っても締まりが落ちないと評判だ。
島風は休む間もなく、その体を貪られ続けている。
陵辱は、彼女が完全に壊れるまで続くのだろう。

一日に相手をするバケモノ達の数が
のべ百体。そしてその監禁生活が200日を
超えようとしている。

ざっと二万回以上も怪物たちに犯され、奉仕し、
その体で射精させてきた島風は、いまや熟練の
性技を身につけている。

そそり立つ二本の巨大ペニスを可愛い顔をして口に運ぶ
その動きを見るだけで、海底のバケモノたちは
快樂の予感に心躍らせる。



手も口も両方使い、交互にサービスを続けて
三分もしないうちに、二頭の怪物は同時に
絶頂に達した。

回の中のモノをいとおしげにさすりながら、
しなやかな手つきで
根元からすべて精液を絞り上げ、
尿道の中の残渣まですべて飲み込む。

よく調教された家畜に対する愛情めいたものを、
周りを囲むバケモノたちは島風に対して
抱きつつある。



妊娠中も人気は衰えることがない。

ぷっくりと膨らんだお腹と、やや大きさを増した乳房をさらしながら、いつものように一生懸命に、汚いペニスを頬張ってくれる。

島風はすべてをあきらめつつあった。バケモノたちに犯されつつ、汚され、孕まされ、産まされた自分は、もう大切にすべき存在だとは思えなかった。

だったらせめて「おヒトたちの役にたてたほうがいい...」そう思いながら心をこめて快楽を与え続ける。



回の中に濃い精液が飛び散り、
顔にも同じものがかけられる。

何の味も感じない。
何をかけられたのかもよくわからない。

彼女の瞳はもう感情というものが
死に絶えているように見える。

『ありがとうね、また島風のお口使ってね』
機械人形のような無機質な笑顔で、
持ち場に帰る常連二人に挨拶をする。



『今日が仕上げ』という言葉。
この触手に固定される前に、
海棲軍艦たちがささやいていたのだ。

犯されるだけでなく、とつとつ殺されるのでは…
そんな危惧を胸に抱きながら、島風は大きく足を開かされている。



おぞましい数の触手が、島風の犯され続けて敏感になった秘所をなぶる。

そして、何本も同時に入ってきた。
恐ろしいほどの快感が全身を走る。

『うっ……うっ……うっあああああっー！』

虚無と絶望で心を安らがせることすらできず、少女は絶叫する。



ブシュツッ！ビュルルツッ！ブシヤアツッ！

体の奥、触手たちが絡み合う膣内と子宮内で、白濁液が爆ぜる。同時に恐ろしいほどの快樂で、島風の意識は焼ききれそうになる。

『んおお……お……お……』

家畜の鳴き声のような苦鳴が、彼女の食いしばった歯の間から洩れる。



今までになくじつくりと時間をかけて、
島風の胎内に宿った仔が育っている。

腫れた重そうな乳房、前に突き出た大きな腹。

今度は何を産まされるのだろうか。



『嫌あ……あ……あ……』

恐ろしいほどの大きさの頭部が、恥骨結合を広げながら産道を通じた。

母乳はすでにとめどなくあふれ、その子を育てる準備は万端といったところだ。

だが、この時はいつもの出産と違った。

何かが壊れたような感覚……心の底が抜けたような圧倒的な虚無感が、島風の意識に沸きあがる。



『う……あああ……ああ……！』

島風の体が徐々に青い光を放ち、意識が暗黒に飲み込まれていく。同時に左目を覆うように、『牙』のモチーフが形成されている。

はじめからこれが目的だったのだ。

心身の汚染が度重なる陵辱で限界を超え、

暗黒に吞まれた島風。

彼女は海棲艦隊の一員として、鎮守府に自ら戦いを挑むこととなった。



『嫌あ……あ……あ……』

恐ろしいほどの大きさの頭部が、恥骨結合を広げながら産道を通じた。

若干黒ずんだ授乳期の乳首からはすでに母乳がとめどなくあふれ、その子を育てる準備は万端といったところだ。

だが、この時はいつもの出産と違った。

何かが壊れたような感覚……心の底が抜けたような圧倒的な虚無感が、島風の意識に沸きあがる。



『う……あああ……ああ……！』

島風の体が徐々に青い光を放ち、意識が暗黒に飲み込まれていく。同時に左目を覆うように、『牙』のモチーフが形成されている。

はじめからこれが目的だったのだ。

心身の汚染が度重なる陵辱で限界を超え、

暗黒に吞まれた島風。

彼女は海棲艦隊の一員として、鎮守府に自ら戦いを挑むこととなった。



汚され、犯され、孕まされて汚染度が
限界値を超えた島風は、新たな海棲艦となって、
鎮守府を襲ってきた。

大きな損害を出しつつもようやく捕獲に成功、
提督が下した決断は動きを封じた島風と二人きりで
独房で『話し合っ』というものだった。



『会いたかったよ、島風…』

言うが早い、提督はスポンを脱ぎ、
島風の性器になんのためらいもなくペニスを挿入する。

『え…なんで…こんな…！』

こうなる前は手すらつないだことが無かった相手に、
いきなり強姦された。ひそかな想いを知ってか知らずか。

だがいずれにせよ許せることではなく、
島風の精神的打撃は計り知れない。

『助けて…くれなかつたくせに…！』

涙を目に浮かべながら抗議する。

『私が…こんなになっちゃうまで助けてくれなかつたくせに…！』

『時間があと少ししかない、お前にまだ正気が残って……うっ……』

言葉が終わらぬうちに、提督は思わず射精してしまう。
島風の膣の締め付けは殺人的なほどの気持ちよさを備えていたのだ。

『いやあああ！中にだしたあああ！』

思わず泣き叫ぶ島風。

『技術部の発案でな……まだ汚染されきっていない部分があるなら、
精神的なショックを上書きすれば戻れるかもし知れないって……』

海棲艦と成り果ててから彼女の心を支配している破壊衝動が、
確かに薄まっているように見える。

『もう一回……いや一回だけといわず、どんどんやろう』

そういつていそいそと拘束手錠の座標操作をする提督。

再び悲鳴を上げる島風。

汚され、犯され、孕まされて汚染度が
限界値を超えた島風は、新たな海棲艦となつて、
鎮守府を襲つてきた。

大きな損害を出しつつもようやく捕獲に成功、
提督が下した決断は動きを封じた島風と二人きりで
独房で『話し合ふ』というものだった。



『会いたかったよ、島風…』

言うが早いか、提督はスポンを脱ぎ、島風の性器になんのためらいもなくペニスを挿入する。

『え…なんで…こんな…!』

こうなる前は手すらつないだことが無かった相手に、いきなり強姦された。ひそかな想いを知ってか知らずか。

だがいずれにせよ許せることではなく、島風の精神的打撃は計り知れない。

『助けて…くれなかつたくせに…!』

涙を目に浮かべながら抗議する。

『私が…こんなになっちゃうまで助けてくれなかつたくせに…!』

『時間があと少ししかない、お前にまだ正気が残って……うっ……』

言葉が終わらぬうちに、提督は思わず射精してしまう。
島風の膺の締め付けは殺人的なほどの気持ちよさを備えていたのだ。

『いやあああ！中にだしたあああ！』

思わず泣き叫ぶ島風。

『技術部の発案でな……まだ汚染されきっていない部分があるなら、
精神的なショックを上書きすれば戻れるかもし知れないって……』

海棲艦と成り果ててから彼女の心を支配している破壊衝動が、
確かに薄まっているように見える。

『もう一回……いや一回だけといわず、どんどんやろうっ』

そういつていそいそと拘束手錠の座標操作をする提督。

再び悲鳴を上げる島風。

また暴れようとする島風を壁際に固定し、
そのやわらかい尻肉をいじる提督。

『お前のパンツの下こうなってるんだな…いい感じだ』

『するなら早くしなよ！どうせ私なんてもう…』

『汚れきったゴミみたいな女なんですよ…！』

『んなことないぞ、ずっとずっと真剣に取り戻そうとしてた』

『嘘！』



「挿れるぞ…痛かったら言えよ」

挿入される肉棒の暖かさに、
なんともいえぬ快さと、安心感を覚えつつ、
こんな形で想い人との初めてを迎えることに悲しみが沸きあがる。

「こんなの…本当は嫌だったんだもん…」

「正気に帰ってきた感じだな、気づく「こゝろ」はないわ」

「どうして…マ…だってあたし…」

「順序が違っただけだからな…う…う…そろそろイキそつだ…」



『で…射精るっ…』

提督の腰が激しく動いたかと思うと、
島風の膣内に暖かい精液が進る。
それは欲情の滾りであることに変わりはないが、
悪意でなく、優しさや気遣いが感じられるものだった。

『うっ…中出したくさんされすぎて
提督のでも嫌になっちゃってる気がする…』

『気にすんなくて。夫婦になってから
たくさんして慣れてけばいいさ。』

『…っ』



次の瞬間、海棲艦のシンボルである歯列モチーフの眼帯が砕け散り、代わりに純白のウェディンググヴェールが島風の頭部に発生していた。

「え…?」

「艦娘は最初に抱かれた

人間の男のモノになるんだ。

ケツコンモードっていう隠しステータスで

戦闘力は無くなるから

本来は平和になってからしかダメなんだが」

「ケツコンって…え!?!」

「文字通りの意味なんだが…その…よろしく…」

「……………」
島風は言葉もない。

彼女が心身の傷を完全に癒し、白いドレスと祝福に身を包むのは、もうしばらく先のこととなる。



また暴れようとする島風を壁際に固定し、
そのやわらかい尻肉をいじる提督。

『お前のパンツの下こうなってるんだな…いい感じだ』

『するなら早くしなよ！どうせ私なんてもう…』

『汚れきったゴミみたいな女なんですよ…！』

『んなことないぞ、ずっとずっと真剣に取り戻そうとしてた』

『嘘！』



「挿れるぞ…痛かったら言えよ」

挿入される肉棒の暖かさに、
なんともいえぬ快さと、安心感を覚えつつ、
こんな形で想い人との初めてを迎えることに悲しみが沸きあがる。

「こんなの…本当は嫌だったんだもん…」

「正気に帰ってきた感じだな、気がする」とないぞ」

「どうして…マ…だ…ってあたし…」

「順序が違っただけだからな…う…う…そろそろイキそ…うだ…」



『で…射精るっ…』

提督の腰が激しく動いたかと思うと、
島風の膣内に暖かい精液が進る。
それは欲情の滾りであることに変わりはないが、
悪意でなく、優しさや気遣いが感じられるものだった。

『うっ…中出したくさんされすぎて
提督のでも嫌になっちゃってる気がする…』

『気にすんなくて。夫婦になってから
たくさんして慣れてけばいいさ。』

『…っ』

